

お年玉はいつから始まったの？

2017年2月23日
学研キッズサイエンス

お年玉は歴史が古く、これには昔(むかし)から伝(つた)えられている特別な意味があるのです。

昔、ほとんどの日本人は神様を信じていました。そして、1年の最初であるお正月には、それぞれの家に神様がやってくると思っていたのです。

お正月に、かざりつけをしたりおそなえをしたりするのは、すべてこの神様のためだったのです。

正月、初日の出と共に家にやってきた神様は、鏡餅に宿り、松の内の期間、家におられます。

おそなえをしてくれたお返しとして、年神様はその家の人たちに「新しい魂を与えます。神様からもらった新しい魂。」

この新しい魂のおかげで、人々また1年間健康に生きていくことができると考えていたのです。

このようなことを昔の人は本当に信じていました。そして、お年玉というのは、神様からもらった新しい魂のことだったのです。つまり、昔はお年玉とは神様からもらうもので、目に見えないものだったわけです。



元旦に、家々に新年の幸せをもたらすために、高い山から降りてくる神様が「年神様」。「正月様」「歳徳神(としとくじん)」とも呼ばれています。昔の人は祖先の霊が田の神や山の神になり、正月には年神となって、子孫の繁栄を見守ってくれるのだと考えていました。各家庭では門松をたて、歳神様を迎えます。神様は初日の出と共にやってき、松の内期間、家におられます。

それが現在のようにお金にかわってしまい、しかも子供しかもらえないものになったのにも理由があります。

昔、神様からお年玉をもらえるのは、家の代表の人だけでした。つまり、ほとんどはお父さんであったのです。

そこで、お父さんは神様からもらった目に見えないお年玉を、お金や記念品のような目に見える形にして、子供たちにわけてあげたわけです。

これが現在のお年玉のはじまりなのです。

